

かせうま
だんご汁物語

西村光代



平安の昔、豊後の国（大分県）の片田舎の黒野に下向し、隠れ住んだ平家の落人の「藤原清磨（つるきよまろ）」と言う若殿様が住んでいたという。鶴清磨の身の回りの世話をする乳母は、京都の八瀬出身だったらしく「八瀬（やせ）」と呼ばれた。八瀬に育てられた幼君は、小麦粉を練って寝かせて、それを長く伸ばして麺状にして茹で、黄粉（きなこ）をまぶした八瀬お手製の小麦粉だんごをたいそう気に入り、「八瀬、美味い！やせ、ウマッ！やせうま！」と言って好んで食べられ、村人もこのだんごの事を「やせうま」と呼ぶようになったという。

そんな名前の由来のある「手延べだんご」を味噌仕立てにしただんご汁。

「やせうま」そして「手延べだんご」を味噌仕立てにしただんご汁。

大分県の一部の地域では、お盆にやせうまを供える習慣があるほど地域に根付いた、郷土料理であるとともに、手延べだんご汁は昔、どの家庭でも、供されたという素朴な郷土料理だという。

米が入手しにくい戦中戦後の時代、すいとんより、少しご馳走という感じで、そのかわりに手延べだんごを、祖母が作ってくれたと父は、よく話してくれた。そんな「やせうま」「だんご汁」を、くつつけて「やせうまだんご汁」と名づけ、その料理に大阪の地で魅了され続け、いつかは、大分県に里帰りさせたいと願いつづけた、私たち一家の物語です。

【やせうまだんご汁とは】

■大分県郷土料理「手延べだんご汁」を現代風にアレンジしたヘルシーな鍋料理

■小麦粉を塩と水を入れながら打ち、親指大の団子にして、ねかした後、めん状にするため両手を使って、手で伸ばして行き、それをゆでる。だしの中に白菜、ごぼう、人参、大根、椎茸などきのこ類、えび、鱧、鯛、鶏肉などをふんだんに入れ、醤油、数種類のあわせ味噌・酒かす・練りゴマで味付けする。薬味は「ゆず胡椒」を使用することにより、味噌・酒かすの香りと溶け合い風味豊かな独特の香りが、多々漂う。栄養満点のヘルシー食。



やせうまだんご汁

【やせうまだんご汁里帰り決意】

私は、小さい頃から「小説家」を目指していた。といつても・小中学生の頃は、時々、読書感想文や作文のコンクールで入賞。高校から大学にかけては懸賞小説などに時々応募。しかし、会社に入り日々のことに追われて、小説家の夢など、はるか彼方に行ってしまった。しかし、親というのは本当に有り難い・・。

そんな子供の頃の夢を覚えてくれていて、時々は励ましてくれて叱咤激励もしてくれた。そして、その時に両親は必ず言っていた「やせうまだんご汁のこと小説にして欲しい」と。

何度か、小説にしようとチャレンジをしたが、どうも構想が沸いてこない。

何をどのように、描いていけばよいのか・・父の思い・母の思いもそれぞれあるだろうしと悩んだり。

しかし、一番の原因は毎日になんとなく追われて、気づいたら日経っていたというのが現実であったように思う。ところが・・いつまでも元気だと思っていた父が平成20年8月15日、60余日の入院であっけなく他界。10余年前から、胃がんを患い、二度の手術を受けても、元気に日々暮らしていたし一緒に旅行や食事も行っていた。

亡くなる数年前に、大腿骨の骨折矯正の手術をした後、週二回介護ヘルパーの方と歩行のリハビリもずっと続けていたので、安心しきっていた矢先だった。病院に救急車で運ばれた時は、まだ少し話もできたのだが、本当に苦しかったのだろう。入院中、ほとんど、まどろみ状態が多く、話らしい話ではできなかった。本当に悔が残る。あんなに「やせうまだんご汁」の小説を楽しみにしていたのに。見せることもできなかった・・いや、それ以上に、「父の思い」を聞くことが出来なくなってしまった。後は、父の友人や兄弟姉、親戚・母やなど、まわりの人たちに聞いていき、私の想像力にて父の思いを再現するしかなくなってしまった。

ホントに、父が亡くなるまで、何もしなかったことが悔やまれてならなかった。

そんな私にも、父の死をきっかけにして、ようやく思いがわき上がってきた。

それは、小説を書きたいという動機ではない。

【やせうまだんご汁を後世に遺したい。大分県の新・郷土料理が大分で、どんな風に産まれて、私たち一家の精神的支柱となり、父のふるさと「大分県」との架け橋となったのか。そして、大分県に新・郷土料理として 里帰りさせたいという。思いを伝えたいという強烈な感情だった。】

本来、書きたいという思いはそんな「念」のようなものなのかもしれない。学生の時は、書きたいこと、伝えたいことが一杯あったことを思いおこした。

出棺前、父の棺に花を飾るとき父に、自分の決意をそつと語った。

「お父さん、安心して。ちゃんと、やせうまだんご汁を後世に伝えるようにする。そして、大分県に里帰りさせるからと・・・。」

そして、関西大分県人会のホームページの、父の追悼記事には下記のコメントをいただいた。

「林田 寛氏は「九州八豊やせうまだんご汁」を拠点に、永年大分郷土料理の宣伝普及にご尽力されました。」
私は、これを読んで号泣した。そして・・・自らの使命を自覚した。

【やせうまだんご汁のひっこし】

今、私の手元には一枚の新聞がある。平成元年8月4日 金曜日 読売新聞の夕刊である。新聞原紙であり、黄ばんでよれよれとなっている。20数年ぶりに押入れから引っ張り出した。社会面に、「やせうまの引っ越し・・・地

ら「長年親しんでもらった道頓堀の店を地価の高騰から閉店しました。今は近くの千日前で小さな店を開いています」という案内状をもらった。十年前から、中座前の五階建てビルをそっくり借りて営業。夫の故郷の大分県の料理で、地元で「やせうま」と呼ばれる小麦粉を打った 団子を基礎にしたなべ物（中略）「やせうま団子汁」がメニューで、これが今年二月、大賞に選ばれた。受賞の時、林田さんは「ミナミの名物にしたい」と張り切っていた。ところが、道頓堀の地価公示額は五年前の四倍にはね上がり、ビルの家賃も値上げを要求された。採算が合うよう増改築を家主に訴えたが、聞き入れてもらえず二か月前、引っ越ししたという。新しい店は、わずか7平方メートルほどで、カウンタ―にイスが四脚だけ。（中略）しかも千日前に近い狭い路地の一角で、周辺にはピンクサロンなどが軒を並べ、道頓堀とはいささか概が違った。店にはギターの流しや、ピンクサロンの呼び込みの従業員らもやってきて「うまい、うまい。応援するで」と団子汁をすする。林田さんは「この方が庶民的で、団子汁がより似合うように思います。もう一度、一から出直して日本一を守っていきたい」と汗をぬぐった（樹）

何か、もの哀しいけれど、哀愁のあるバブルのドラマという感じの記事だね。などと、当時、母や家族と話した。私は、現在、47歳。あの時、一から、いや、金銭面だけ考えるとマイナスからスタートした母は、今の私と同じ年齢だったかと考えると、勇氣、いや、それ以上に因縁を感じる。

この年、平成元年。日本はバブル経済の絶頂期だった。大賞受賞の新聞報道は2月9日。昭和天皇の大喪の礼は、奇しくも受賞より後の2月24日であった。

大賞をとった「やせうまだんご汁」も昭和と共に終わるのかなあと。何か哀しさを感じた記事であり、大賞受賞は一生懸命大分のだんご汁を伝えてきた勲章みたいなものかな？とも思ったものだった。

昭和の終焉。ひとつの時代の交代の時期だった気もする。時代は、リクルート事件でインサイダー取引が発覚。多くの大物政治家の収賄の事実が発覚した。ベルリンの壁が崩壊、中国では天安門事件が起きた。

消費税スタート。産業界では偉大な松下幸之助氏も亡くなった。

平成元年・天皇崩御にはじまり、ベルリンの壁崩壊で終わる、まさに「崩」の年だった。その年の12月29日、東証の日経平均株価が史上最高値の38915円87銭を記録した。狂喜乱舞のバブルの時代。小さなそんな店のふるさとの味「やせうまだんご汁」は新聞の片隅で、街の片隅でひっそりと語られ、そして忘れられていくのだと、世の中の多くの人が思っていただろう・・・いや、私自身が思っていた。

心に残るふるさと
鍋ものズラリ
新・郷土料理大賞
17代表きまる
日本一、はどこに

読売新聞 平成元年 2月9日朝刊
日本一受賞記事

日本一受賞の記事 概要まとめ

【やせうまだんご汁再スタート】

やせうまだんご汁の再出発が決まった。5月に道頓堀を閉めてから、約1ヶ月。6月中旬、紫陽花が色づきはじめた頃だった。店の名前はいままでの「八豊・・はっぼう」から屋号変更。「九州八豊やせうまだんご汁」これが新屋号である。店名の由来は、元々の「八豊」は残したい。この「八豊」は、大分の八面山に父が信頼している坂井先生という方がおられる。その方に相談して、八面山から八という字をいただいた。また末広がりという意味もある。豊は大分・豊後の豊。確か、豊饒やら何やら八つの豊の意味もあったような記憶もある。これも今となっては思い出せない。残念である。

残したい理由の第一は新スタートにあたって、道頓堀の頃から応援し続けて下さった、大分県玖珠の酒造メーカー「八鹿酒造」様の社長（現・会長）麻生太一様より「これからもずっと八鹿とご縁をただきたいので八鹿の八の字残して下さいね」という、お言葉をいただいたようだ。

道頓堀200席から、千日前4席になった時に、いままでのお取引先様も不安になられると思う。しかし、その時のお言葉が、今でも、心の支えになったと母は言う「八鹿のお酒を一杯売れる店にしたい」そんな、熱い気持ちを持ったと言う。その後、20余年。現在は、ご子息の麻生益直様が社長にご就任。そして、孫の益寛様も時々、店にお見えいただく。文字通り三代に亘ってのお付き合いをさせていただけられるようになった。

店の名前の話に戻るが、八豊だけでは、今までの大きな店のイメージで少し大層すぎるということで、両親の恩師である、安岡正篤先生の弟子の一人の、豊田良平様（故人・当時関西師友協会副会長）に相談した。この方も、父と同郷ということで、言葉には尽くせぬお世話になった方だ。豊田様は「かきくけこ」の音のつく名前を最初に持ってきたさい」というアドバイスを下さった。母は「九州」はいかがでしょうか？」「それでいきなさい」とい

うことになった。そして、大賞の「やせうまだんご汁」この名前を、後につけて、なんともおぼえにくい長い名前
の店名が誕生したのである。名前は覚えやすく、短いほうがいいという定説を全く逆行した。母は大阪日本橋千日
前で。父は、大阪市中央区役所の近くの大阪市中央区博労町というビジネス街のはずれで、その店名でスタートした。
父の店も小さな小さな店だった。5坪ほどだったと思う。持ち帰り中心で、カウンターは4席ほどだったか。いず
れも、今となつては、写真の一枚も残っていない。走っている時は一生懸命で、あとで、その思い出の尊さとか大
切さに気付くものだ・・・。

「やせうまだんご汁」と書いた、小さな店には少し不釣り合いなほど大きい提灯を父は店に掲げた。

母は、道頓堀の店から一緒についてきてくれた若い従業員の方と、ペンキを買ってきて、大きな看板を作った。
今は、それぞれの道を歩んでいる元・従業員の方も40歳くらいになっている。彼らは、今でも時々現在の店に訪ね
てきてくれる。その時の思い出話を語りだすと、なぜか青春時代のようにだと言ってくれ、毎日走って走っていた
のかもしれない。

母も父も「やせうまだんご汁」の出前などを近隣の方にする機会をいただいた。父は、50CCのバイクに乗って、
配達もした。私の会社までバイクで10分もかけて「やせうまだんご汁」の配達をしてくれた。会社の皆も応援して
くれていたのだ。それと、当時、飲食業足掛け20年の歴史は重い。いままでの、お客様が気にかけて下さり、様子
見がてら店まで良く来て下さった。大きな店のオーナーであった両親、再出発の時、父は54歳。母は47歳。

小さな小さな店舗で、黙々と一人で働く父の姿や母の姿を、皆様はどんな気持ちで見えておられたのだらうと思う。
時はバブル絶頂期。私は、微塵も不安がなかった。自分の生活に忙しかった。

の母が勉強会に行きたいと言い出しのだ。まして、娘がその勉強会を主催するコンサルティング会社の社員であり、また、勉強会の事務局担当をしているのである。

多分、母は、自分のこれからの方向性を漠然と思い描いていたのだと思うが、自分の中でしっかりと形づくり、先の自分の夢・ビジョンをしつかりと持ちたかつたのだと思う。なぜならば、その後、私はその会社を平成3年2月28日に退職して転職。そして、17年後「やせうまだんご汁継承」の漠然とした目標を持ったときに、再び横井先生を訪ね、その勉強会に生徒として入会させていただくお願いをしたからだ。自分のことを、客観的・冷静に見つめるのは本当に難しいと実感したからだ。私も、無意識の内に同じ道を歩んでいる。

【やせうまだんご汁のCI（コーポレート・アイデンティ）】

その当時、横井先生から、教えていただいた言葉で母がよく口にする言葉がある。「人間は無限の知恵・愛・エネルギーを持っている」これは、デール・カーネギーが著書の中でも書いておられたということであるが、横井先生はこの言葉を「LMP信条」というものに、まとめられて勉強会の時に皆で唱和をしていた。この言葉で、当時の母は勇気付けられそして、「やせうまだんご汁」の再出発にまい進する原動力となったと言う。

それから20年後、横井先生が、今は、一階・二階あわせて70席近くなった店にお越し下さった時に、母は当時、その言葉に力付けられたとその言葉を復唱して横井先生・そして現在の勉強会メンバーを笑わせていた。20年前に暗誦した言葉は言霊となつて、言葉がいつでも飛び出すのだなど感動した。当時、平成元年の頃は、好景気ということもあったが、企業のCI活動がトレンド経済の一翼ともなつていた。CI：コーポレート・アイデンティの略。

企業哲学、企業ビジョンを世の中の多くの人にわかりやすく伝えていくという活動である。当時多くの企業で、大

企業・中小企業問わず、中長期経営計画を策定、経営理念の再構築に基づき社章や、会社のイメージカラーや、ロゴ、社名変更、ユニフォームの見直しなどが行われていた。

LMP勉強会も経営者の集う勉強会。先進的で前向きな経営者の方が多く集ってきておられたので、皆様、熱心に自社の方向性や社会貢献活動なども考えられ、自分の会社のベクトルを全社員であわせることをテーマに、LMP内でCIの勉強会も行われていた。母も聴講したのだと思う。その勉強会の仲間のお一人に印刷企画・広報関係の会社の専務の方が参加されておられた。堺に本社のある、太陽マーク様という会社だったと記憶している。そちらの専務さんにご指導・ご支援をいただき、母の「やせうまだんご汁」のCI活動はどんどん進んでいった。

【やせうまだんご汁のロゴ誕生】

考えてみると、4席の店での再スタート。40代半ばだった母。そのパワーを考えると、私が、とても元気になる。「やせうまだんご汁」のCIの一環として、ロゴマークができた。道頓堀の「八豊」から生まれた豊後鍋く新郷土料理大賞日本一となった。「やせうまだんご汁」は、店舗の中の一メニューから、「やせうまだんご汁」が一人歩きをし、店という枠ではなく「やせうまだんご汁」＝「店」というように、生まれ変わったような気持ちでした。母は「道頓堀のお店もなくなってしまったけれど、このやせうまだんご汁だけは残った」「この、やせうまだんご汁をなんとか残し



平成元年当時のロゴ

たい」そう言って、このロゴの横にキャッチコピーを入れた。【21世紀に伝えたいと】

一九九一年 陽春のころ。母は、10年の計をロゴに刷り込んだ。

道頓堀の店舗無き後、弟も母の店のすぐ側でショットバーの営業をしていた。

食事の後、立ち寄る雰囲気のお店だったが、この店でも「やせうまだんご汁」を召し上がっていた。何度も、弟の店まで出前をした。ロゴの入った箸袋と共に。父は、ビジネス街のはずれで・・やせうまだんご汁の提灯を出して、持ち帰り弁当の店を営みながら、小さな店に、小さなカウンターをこしらえて「やせうまだんご汁」を召し上がっていた。また出前も近くの方にさせていた。もちろん、父もロゴの入った箸袋と共に。千日前の店でも、近くの飲食店の方がよく食べにきてくださった。

会社帰りに、店に時々立ち寄った私は、スーツ姿で近所の飲食店やマージャン屋さんやスナックなど、たくさん出前に行った。家族全員、本当にそんな風にして一杯一杯、思いを込めて、「やせうまだんご汁」を伝えていった。基本の形は変わっていないが、この本の表紙のロゴは最新のロゴである。21世紀になったので、キャッチコピーをはずした。21世紀まで伝えた。次なるキャッチコピーは、母はまだ、模索中なのか・・。「次はあんた達が考えて行くんだよ」とも言われているような気がしてならない。

このロゴは平成20年8月に商標登録としてようやく認定された。申請者名は、母ではなく、私に残せる唯一の財産として、私の名前で登録商標をしてくれた。申請を希望してから、いろんな事情があり、何年間か年月がかかった。病床の父に、この報告ができてホッとしている。この報告をして1ヶ月もたたず、天に旅したが、きつと応援してくれていると信じている。

私には弟がいる。やせうまだんご汁の長男である。ただ、弟は、道頓堀の店撤退の時に、ショットバーを経営

し、料理の道とは違う道に進んだ。そして、そこでいろんなことを考
え、金融の仕事も経験し平成6年に29歳で起業をし、現在はIT関係の
会社を経営している。実は、私も弟も、道頓堀以降「やせうまだんご
汁」を母がここまで頑張ってくれるとは思っていなかったと思う。（お
母さん、ごめんさい）

私たちも、若かった。自分の仕事のスタンスを作るのに必死だった
気もする。「やせうまだんご汁」は、親のモノという意識だった。母
も弟も私も、それぞれが突っ走ってきた時期かもしれない。その間、
父は、胃がん摘出手術を2回。2回目手術のあと、自分の店を閉店
し、闘病生活を続けながら故郷の大分県立国東高校の同窓会の関西支
部の仕事をライフワークとして取り組んだり、関西大分県人会の人脈
で、やせうまだんご汁を広めていってくれた。でも、その時「やせう
まだんご汁」の将来を考えていたのは、恐らく母だけかもしれない。

【やせうまだんご汁と父】

平成元年に道頓堀の店を閉店してしまった父は、財産と呼べるものは何もなくなってしまうた。残されたのは、借金と、裸一貫（当時、母はよくこの言葉を使った。子供心に、何かすごいイメージがあったことは事実だ）から



平成20年8月号「大阪人」掲載。
この記事には、この頃からの「やせうまだんご汁のヒス
トリー物語」を掲載いただいた

頑張ってきたという父の商売への誇り、そしてオリジナルメニュー「やせうまだんご汁」だったのではないかと思う。平成元年5月15日。道頓堀の店の受け渡しの日のこと。

店舗明け渡しの日、弟・母・父・私・私の夫、恭司が立ち会った。私は、17歳から22歳まで、道頓堀のこの店で一日10時間以上は働いて過ごした。それは、父との思い出にもつながる。母が自分の店を、母の弟（私の叔父）に譲って道頓堀の店の「女将」として来るまで、ずっと、父と明け方まで働いていた。一応、大学生だったが（笑）。昼夜逆転した、大学生の私は、ゼミの担当の先生のご配慮もありなんとか4年で卒業した。

父は、明け渡しの日のことを生涯語ろうとしなかった。結局、それぞれが自分の今までの人生と照らし合わせていろんな、感慨の中で、自分の記憶としてとどめているのだと思う。

・・・・・・とうとう、道頓堀は閉まった・・・・・・

そして、しばらく経ってから父は新しい店舗を探してきた。大阪のビジネス街の、少しはずれたところにある博労町という街だった。

持ち帰りの弁当屋とやせうまだんご汁をお椀で出す店をはじめるといふ。

500円のお弁当、何食売らないと利益でないのか。考えるだけでも恐ろしい。父は、すべて手作りでするといふ。当時、「ほっかほっか亭」「かまど屋」さんなど大手のテイクアウト弁当のFC全盛の時代であった。

逆行しているのに・・・チェーン傘下は加入資金もなかったが、父は、自分なりのオリジナルティを貫きたかったのかも知れない。

料理素材の仕入れも弁当箱・ゴム一本に至るまで、父はバイクに乗って大阪中を走った。自分で、大阪千日前にある、飲食業者の間屋街・道具屋筋に行つて、提灯を買つてきて「やせうまだんご汁」と字の上手な大先輩に書い

てもらい、暖簾もかけた。しかし、父は、以前、母に「やせうまだんご汁」なんか大阪では流行らない・売れないと言っていたらしい。故郷・大分での「だんご汁」は父にとつて、非常食だった時もあつたようだ。

でも、父のプライド・大好きな故郷を出て、サラリーマンをして、脱サラして商売をはじめて、たくさん支店を出して人も育てた。希望する従業員には「のれん分け」という形でお店を持たせて。その集大成として残つたものは「やせうまだんご汁」だったのかもしれない。母が考案して新・郷土料理大賞を受賞した料理だったが、父にとつても、思いが詰まつたものだったに違いない。だから、提灯に思いを込めたのだと思う。

弟はショットバーでだんご汁を出し、母もだんご汁と惣菜の店を出し、父もだんご汁を売り始めた。

私は、26才だった。自分の人生には、まだまだ可能性が一杯あると思ひ込み林田家で、私だけ、全く違う仕事の分野にのめりこんでいた。

平成元年当時の大分県は、平松守彦知事が「一村一品運動」を勧め、大分県の観光・物産を推奨しておられた頃である。関西大分県人会に来賓として、平松知事がお越しになられた時の、ご講演で「大分県に高速道路を」「大分県ブランド食材」を！！ 提唱しておられた記憶がある。

そんな県政を背景にした中で、現在、大分県郷土料理の筆頭格として言われている「やせうま」「だんご汁」は当時、大分県からのお土産品としては、まだまだ知名度がなかった。

父は、「やせうまだんご汁」を在阪の大分県出身の方に知っていただくために関西大分県人会の会合を皮切りに、在阪の大分県市町村会・同窓会の例会のメニューに加えていただくためにも頑張つた。

父の店は父一人で営業していたので、母の店の従業員の方、そして私と夫。義妹（弟の奥さん）私の友達なども総動員して、いろんな大分県関係の会合に「やせうまだんご汁」を提供に行つた。

ほとんどの会合は、元々、ちゃんとした厨房もあり料理人の方がおられる会場である。都ホテル（現、シエラト
ン都ホテル）・大閣園・リーガロイヤルホテルNCBなど、そうそうたるホテルの献立メニューに介在し、そして、
厨房まで 貸していただくという厚かましいことをしていたのだから、今から考えるとすごいものだ。ある程度の
調理までをホテルの厨房を貸していただき会場の中に屋台をこしらえていただき、そこで一杯ずつ、カセットコ
ンロで作って提供していた。ハッポウスチロールのお椀に「やせうまだんご汁」を何杯も作ってテーブルを回って
配らせていただいた。

山本 純さん（現・大分県選出衛藤征士郎代議士大阪事務所担当）は、パーティの料理に目もくれず、私たちの
屋台に何回も並んでくれて「これで4杯目です」といつも言うて私たちを喜ばせ
てくれた。

山本純さんとも、その後、このことがきっかけとなり、本当に親しくなり、父の
葬儀では、大分関係の受付一切、そして、趣味でされているホームページ製作の
かたわらに、実家の「やせうまだんご汁」の ホームページの製作を一手に引き
受けていただき、私たちを助けて下さっている。最高の協力者であり、友人となった。
この、各会合の中での思い出で、強烈なのは、関西大分県人会60周年の時「1500
食」を提供させていただいたことだ。

当時の、我々のキャパシティでは、到底対応できる量ではなかったが、「どな
いかしちよる」と受けてくるのはさすが父である。

この時も従業員だけでは対応できず友人・家族総出で1500食を提供した。



関西大分県人会 60 周年の頃（大阪上六 都ホテル厨房にて）

それから10年後の関西大分県人会70周年。店も少しは大きくなったが、肝心の父が、闘病中で 相当弱っていた。70周年1500名近くのお客様が来られたが、この度は、会場となったニューオータニのコック長さんにレシピをお渡しし母が教示するという榮譽にめぐまれ、その日のメニューには、「やせうまだんご汁」（だんご汁ではない）が提供された。病気で、一回り小さくなった父が、義妹に付き添われて1500名の中の一人としてテーブルについていた。私は、その日、県人会のお手伝い役として舞台のそばから父の姿を見た。父は自分が自ら「やせうまだんご汁」を提供できないのが、残念そうに少し寂しそうに座っていた姿が、私には忘れられない。

父にとつて、やせうまだんご汁は、商品であると同時に、大分県との強い強い絆・大分の仲間とのツールだったのだと思う。お陰で、私は、いつまでたつたも「西村光代」ではなく、関西 大分県人会では「やせうまだんご汁の娘」である。すでに嫁いではいたのに・・・夫に申し訳ない（笑）

初対面の方でも「ああ、あそこの娘さん。お父さんには世話になったよ」から、話しがはじまる。それで、どれだけの友人やお世話になった大先輩たちとの、ご縁が広がったのかわからないくらいである。

昨年、会社の名刺とは別に、個人の名刺を作った。名刺の裏には「実家店舗・やせうまだんご汁」と刷っている。そちらの方が話しが早いからである。私にとつて、「やせうまだんご汁」を語ることは、両親を語ることであり、自分のルーツであることに改めて気づかされる。

【フェリー祭りとやせうまだんご汁】

平成20年 真夏の暑い頃だった。その頃、父は、いつ、何が起こってもおかしくない状態で、大阪中之島の住友病院に入院していた。一進一退というのか。食事を取れる日もあれば、終日、眠りつづけている日もある。

そんな頃に、大分県大阪事務所の観光物産課の方から一本のお電話をいただいた。「今度、大阪の南港に新しくフェリーターミナルができます。それを記念して、フェリーが寄港する各港の物産イベントを行ないます。大分からはとり天・とり飯・ハムやコロッケなどが出来ます。ぜひ、そちらでも(やせうま)や(だんご汁)の催事をしていただけませんか」というご依頼だった。普段なら、大喜びで参加させていただきたいところである。ただ、父の病状が安定しないこともあり、最悪の状況を予測しなければならぬ時期であった。万一のことがあった時に、この催事に穴をあけるわけにはいかない。

そんなことを煩悶していた時に、母はいとも簡単に言った。「何かあったら店を閉めて、従業員みんなにフェリー祭りをしてもらったら大丈夫」と。さすが、肝っ玉が据わっていると、私たちは思ったものだ。そして、せっかくの機会だからとフェリー祭りには、大分日田に工場のあるサッポロビール様の生ビール。我々の、旧知の最高のパートナーである八鹿酒造様の焼酎・日本酒の提供。そして、大分県国東の林家・林田かまぼこの天ぷら・かまぼこ。ゆず胡椒も準備して「やせうま」「やせうまだんご汁」を扱う催事を実施した。サッポロビールの営業の方、八鹿酒造の営業の方、そして、私の友人。家族。その時は、中学一年生の姪ひかると高校一年生の甥慎平まで狩り出して、言葉通り、一丸となって、フェリー祭りで頑張った。先述の山本純さんも会場まで来て下さり、ちらし配りをしてくれた。その時の支援メンバーは大分県出身でない方も多かったが、大分県代表という看板を全員が徹底して意識した。事前ミーティングでも、その心の熱さが伝わってきた。おかげさまで、他の物産催事を圧倒するスペースと販売数。何よりも、嬉しかったのは、大分出身のお客様から、お褒めの言葉をいただいたり、お持ち帰りの所望も多く、後日、店舗へのリピートも多かったことだ。また、すぐ側にA.T.C.(アジア・トレーディング・センター)があるということも影響していたと思うが、アジア、特に韓国・中国のお客様にも喜んでいただけた。この味は「ア

ジアを制する」などと、皆で、喜びあったものだ。

平成20年7月19・20・21日。3日間のフェリー祭りは無事終えた。

私の誕生日は7月19日。46歳の誕生日をその会場で迎えた。友人夫妻が私の大好きなひまわりのアレンジメントフラワーを会場まで届けてくれた。その花は、私たちの催事を飾ってくれた。そして、私も、年を経る時に、毎年、持つ感慨「やせうまだんご汁」をもっともつと育てて行きたいと言う大きなビジョンが、心に炸裂した。

フェリー祭りの会場のすぐ側からサンフラワーが、夕陽の中、岸壁を離れていく風景が、「この船に乗ってやせうまだんご汁も大分に連れて行ってやりたい」という感傷になった。奇しくも、「大阪道頓堀名物食いだおれ太郎」が別府に行くという企画がその時同時に立てられた。道頓堀の「くだおれ」というお店は、昔、実家の道頓堀店舗のすぐ側で、営業をされていて、いろんな意味で商店街をリードされてきた老舗だ。そのお店も、諸般の事情から、平成20年閉店をされた。残ったのは、「食いだおれ太郎」。平成元年道頓堀(とんぼり)名物を目指した「やせうまだんご汁」と「食いだおれ太郎」。大分でまたまた結びつくことができるという楽しい偶然に私は、大げさかもしれないが、運命を感じた。

フェリー祭りの無事終わったことを病床の父に告げた。父は一言だけ言った。

「ようけ、売れたかえ?」



フェリー祭り「八鹿とサッポロビールコーナー」
関西大分県人会 青年部メンバー：平田氏と藤井氏



フェリー祭り「やせうまだんご汁コーナー」
義妹・林田真穂とベトナムからの留学生レー君

【私とやせうまだんご汁】

今、私の手元に一冊の本がある。【「B級グルメ」の地域ブランド戦略】という本である。大阪市立中央図書館で、この本が私を呼んだのか、私が、呼んだのか・・・わからないが、気づいたら私の手元にあった。図書館には借りれる期間がある。2週間である。何回も何回も延長申請をして、一ヶ月半ほど手元にある。他の方の予約が入れば延長はできない仕組みになっているのでこの本の予約が入らないのだろう。本当に、この本との出会いは天の配剤としかいいようのないタイミングで私の前にあらわれてくれた。お恥ずかしいことに、私自身「B-1グランプリ」の存在をこの時まで知らなかった。私の「やせうまだんご汁」里帰り構想に、はずみをつけてくれたのは、言うまでもないが、私と同じ思い・構想を持つ方がこんなにもおられたというくらい、私の思いを代弁してくれている内容だった。私にとって「やせうまだんご汁」は単なる料理ではない。それは、私のルーツであり、唯一、後世に、私たちファミリーの生きた軌跡を伝え、遺していけるものである。

古の中国の偉人たちは「歴史に名を残す」ためには現在の自分の生命を賭ける事も辞さなかったという。そんなに大偉業は、望むべくもないが、この宇宙で、何かひとつでも生きた証を遺したい。子供を持たなかった私には悲願である。

平成21年の新年、喪中であった我が家では、知己の皆様に必要な喪中の挨拶状を出した。

【拝啓 今年もあとわずかとなり激動の平成二十年をしめくくる頃となりました。

本年は、何かと、お世話になり心より感謝申しあげます。

実は、本年、八月十五日に、光代の父、林田寛が七十四歳で永眠致しました。

生前中のご厚誼に深謝申し上げます。父は、最期六十日余りの入院生活でしたが、亡くなる前日まで、病氣と闘い、リハビリの先生と共に自力で起き上がる訓練をしておりました。四十代半ばを過ぎた私たちが、ともすれば時代の不安定な中で、心が萎えそうになる中、父の、懸命な生きる姿が脳裡に焼きつき、勇気を貰っております。

父は、大分県国東半島で生を享け大阪の地にて証券マンとしてスタート、高度成長期の頃に当時の「脱サラ」を志し、飲食店のチェーン店を起業致しました。晩年は店舗を縮小し、大好きだった故郷の郷土料理の専門店を伝えたいという思いを持ち、大阪・ミナミの千日前で、母と共に提供させていただいております。現在も、母が父の遺志を継ぎ、頑張っております。

私自身は、今年父の看護の関係もあり、四月より仕事の方を非常勤としてもらい家業の飲食店の手伝いをさせていただく時間を得ました。

自分の職業人生の中で意義のある時間であったと感謝しております。

来年は、自分なりの方向性を確立し、新しい事業に着手していきたいと考えております。長年培ってきた「人材育成」の分野。そして両親の遺産である「食」という部門。この二つを柱として、家族・弟妹、力をあわせ何らかの形にしたいと決意しております。父が生前中無言で伝えてくれた「生きた証」を一つ一つ積み重ねていけるよう尽力して参ります。喪中につき、年始のご挨拶はご遠慮申しあげますが、貴家ますますのご繁栄と明年も変わらぬご厚情の程お願い申し上げます。平成二十年十二月】

と・・まあ、すごいことを書いたものだ。
ハガキ枚数 600枚以上なので600人以上の方に大層な公約をしてしまった。

【大分県とやせうまだんご汁】

実家が大分県郷土料理の店で、また父が大分出身ということもあるが、私自身大分生まれでないからこそ、余計に大分のことを知りたい。大分の中で、いろんな方と知り合いたい。もともともと、自分のルーツを知りたい。大分生まれの方なら、自然に身につくことが、自分にはできないので、余計に思いが強くなり、大分のことをもっと深く知るために、関西大分県人会の活動を続けて来たのかもしれない。また、関西大分県人会で広報委員を拝命し、会報の編集作業をさせていただいているのかも、そんな自分の潜在意識かも知れないと最近感じる。

歌舞伎役者の女形の方が、本当の女性よりも、しぐさや舞台での雰囲気は女性らしいと聞く。そんな高尚な世界にたとえるのは、失礼な気がするが自分には、一生かかってもなれない大分生まれ・大分育ち。だから「やせうまだんご汁」に託すのかもしれない。父は、大阪に住んでも本籍は産まれた場所（現在も本家がある）から移していない。弟も本籍は父と同じである。私は嫁いで京都が本籍地になった。主人の父の生まれた場所である。

夫はここで生まれ育っていないが、ルーツということでは思い入れがあるようで、やはり移していない。ルーツって：不思議だ。

父の初盆も墓の建立も済んだ。分家の父は、新しい墓を造らねばならない。

父は、生前、母や弟達と話し合って、関西奈良の地に墓地を用意した。本当は大分県に墓を造りたかったのかもしれないが、我々の生活の本拠地が関西にあるのであわせてくれたのかもしれない。母は、そのうち、墓の横に「国東塔」を建てると言っている。

本家の叔父が「兄貴（父のこと）の骨を分骨してもらって、国東の墓に入れたいと、よほど思ったけれど、それは

余り良くないと聞いたからやめた」と言っていた。魂はどこでもさまようことができるから、きっと、国東にも行っているに違いない。叔父の気持ちをとでも嬉しく思う。

父の里帰りを待っていてくれた叔父一家の気持ちに報いるためにも私たちとの縁をもっと強固なものにしていきたいと思った。父の墓石には「縁」という文字が彫られた。弟らしい気配りだ。

そして、その年の平成21年8月30日。午前6時。大阪西郵便局から一通の郵便を出した。20数年ぶりに仕事での徹夜をした。大分県ビジネスプランングランプリの応募書類作成のためだ。

私の志を知る、大分合同新聞社大阪事務所に勤める友人から「大分県内のことをリアルタイムに知ること必要なのでは？」というアドバイスもあり県内ナンバーワンのシェアを取る、大分合同新聞の定期購読を7月の半ばより始めていた。残念ながら、到着は1日遅れになるのだが、生き生きとした誌面には大分の香りが満載されていた。

そんな時に、偶然、目についたのが大分県産業創造機構が主催する大分県ビジネスプランングランプリの募集記事だった。そんなに大きな記事ではなかったが、私の、脳裏にひらめくものがあった。イメージとして持っていた「やせうまだんご汁里帰り」を事業計画としてまとめる、いい機会にもなると思った。何と言っても、「やせうまだんご汁里帰り」と言っても、感傷だけでは実現しない。そこには、必要な資金・そして協力者の力が不可欠である。そのためには、私の志をわかりやすい、多くの方にご理解いただける事業計画書の存在が必要となる。しかし、伝えたい思いが多すぎて、結局まとまらず、8月31日の締め切りぎりぎりとなった。

残暑の厳しい頃だったが、早朝の空気は澄んでいた。青空が広がっていた。徹夜明けのその日は関西大分県人会

青年部北港でのバーベキューの日だった。一仕事終えて、少し、興奮気味だった私は県人会青年部メンバーに「やせうまだんご汁里帰り構想」を語り、皆に協力して欲しいと声高らかに伝えた。

平成22年2月1日。

「やせうまだんご汁里帰りプロジェクト」は、大分県ビジネスプラングランプリコンテストで「創業チャレンジ賞」に入賞したと連絡をいただいた。そして、大きな褒美がついて来た。賞金ももちろんだが、表彰式の日に行なわれる、イベントで「やせうまだんご汁」を提供させていただけるといふ最高のご褒美だ。場所は別府の「ビーコンプラザ」大分県で一番大きなコンベンションホールだ。そんな立派な場所で「やせうまだんご汁の里帰り第一弾」が実現できるとは、奇跡が起こったと思えない。

大阪南港のフェリー祭りで誓ったように、「やせうまだんご汁の里帰り」を実現させるために、そのスタートとして、やはり、フェリーサンフラワーで器具材料など一式を積んで里帰りをする。

平成元年に大阪で「やせうまだんご汁」は産声をあげた。大自然の恵みをたくさん持つ素晴らしい大分県を父として母として。

今、その父と母が待つ故郷に、成人した「やせうまだんご汁」は今、また大志を抱いて里帰りをする。今度は、大分県から全国に「大分県の新・郷土料理のやせうまだんご汁」として巣立っていくために。

あとがきにかえて

この「やせうまだんご汁物語」は、平成21年5月から7月中旬にかけてヤフーのブログに、書き綴ったものをまとめました。当時、「やせうまだんご汁」を多くの人に伝えたいという夢だけは持っていた私でしたが、何から手をつけていいかわからない状態だったので、まずは、自分の気持ちを鼓舞させるために書き始めたのがきっかけでした。

そして、自分なりに、里帰りが第一弾が果たせたら、このブログをまとめて、本にしてお世話になった方にお渡ししようと考えておりました。その後、思いもかけないことから里帰りができませんでした。

平成19年8月15日、当時、弟が社長を務める株式会社イトアップの経営管理部門に勤務していた私は「会社を辞めたい」と、弟に伝えました。

「辞めてどうするのか？」と問われた時に、私は「やせうまだんご汁を広める仕事をする」と答えました。しかもその時は余りにも漠然としており、実家の店を手伝うことくらいしか頭にはありませんでした。

結果として、それから約一年半。実家の店の手伝いと元の会社の総務業務の一部を非常勤社員の立場で続けさせていたただきながらも、その構想は手付かず状態で、毎日、毎日焦燥感が募っていました。

20年以上続けている経営管理の仕事は、法律にも、また仕事の中味も熟知しており回りの社員の皆様からの支援もあり、自分にとっては唯一、存在感を感じれる場所でした。逆に飲食の分野は、あまりにも、今までの仕事とかけ離れ、何よりも継承したい「やせうまだんご汁」を作ることも、だんごをひっぱることもできません。何度か、「も

うやめて、元の仕事で頑張ろう」とも思いましたが、何かが私をせきとめました。

それは、やせうまだんご汁を応援してくださいとくださるたくさんのお客様であり、私の志を知る友人。お取引様、店の従業員の皆様の励まし、関西大分県人会の皆様や大分県大阪事務所の皆様の言葉でした。この場を借りて、心より御礼申し上げます。また、本にするにあたり、様々な便宜を図っていただきアドバイスを何度もいただき、励まし続けてくださったトップサインの浅井さまに感謝申し上げます。

そして、経済面や精神面でも応援し続けてくれた、家族・親族に伝えることができるよう、精一杯邁進致します。

どうぞ、皆様の応援・ご指導お願い申し上げます。

西村光代

平成22年2月4日



大阪・やせうまだんご汁店舗

〒542-0074 大阪市中央区千日前 16 - 10

TEL : 06-6214-5512

ホームページ

<http://www15.ocn.ne.jp/~yaseuma/>

やせうまだんご汁

※検索サイトは「やせうまだんご汁」で
検索して下さい。